Heterolysis

あるれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈｅｔｅｒｏｌｙｓｉｓ

【Ｎコード】
Ｎ４６０８Ｎ

【作者名】
あるれん

【あらすじ】
僕と、渚と、薫子と、それからわたしの話。

僕と渚が出会ったのは高校一年の時で、それは世に数多ある出会いと同じで、とても凡庸なものだった。平行ではない二本の直線は、運命や宿命の力など無くても、二次元平面空間である限りは必ず交差する。僕らの出会いはそういう数学的なものであり、特別でも何でもなかった。誰とも出会わずに生きていける人間なんていない。でも、もしそういう人がいたら、きっととても幸せなのだろう、とも僕は思う。

地元の中学から地元の高校に進学したのにも関わらず、その高校に友達と言える相手はほとんどいなかった。僕は元々交友関係が広い方ではなく、いつだって受け身だった。顔見知り程度の相手なら相当な数がいた。顔と名前だけは何となく知っているが、話したこともない相手だ。僕は、そういう人々にどう接すればいいのか分からなかった。僕から見れば「顔見知り」であっても、向こうにとってはどうでもいい他人の一人かもしれない。僕にとっての彼らの価値と、彼らにとっての僕の価値は相対的に絶対的に異なっている。だから僕は、彼らとすれ違うたびに七で割られた一六のような気分になった。

渚とは入学式の時に割り当てられた席が隣で、その時から何となく印象に残っていた。人の群れに埋もれてしまいそうなショートの黒髪に、これも地味なメタルフレームの眼鏡。どこまでも主張をしないタイプで、内向きで、受け身。放っておいても突っかかってくる相手がいない限り、ずっと放って置かれる種類の子だ、と一目で分かった。クラスに一人はいる。運が悪ければいじめに遭う。僕と同じだった。

初めて彼女と言葉を交わした時のことを、僕ははっきりと覚えている。ごめん、だ。廊下から教室を横切り、自分の席へ戻ろうとしたときに、彼女の椅子にたまたま足をぶつけてしまった。それでご

めん、と謝った。それだけだった。彼女が何か返事をしていたような気がするが、覚えていない。それを聞き取るより早く、僕は席に着いていた。気恥かしさと、無関心。その頃はまだ、後者が優っていた。

いや、無関心ではなく、怖かったのかもしれない。僕にとっての彼女は、どうしてか印象に残る女の子だった。だけどそれは、彼女から見ても同じだとは限らない。無言で関わらないでいるけれど何となく嫌いな相手、ということもある。僕にも、知りもしないのに無根拠に嫌っている相手がいた。それも沢山。たとえば、廊下ですれ違う「顔見知り」とか。

「でも、もしかしたら、その子もお前と同じこと考えてるのかもしれないぜ」と清水が言った。「互いに存在だけは認知してて、何となく友達、或いはそれに類する関係になれればいいなと思っているけれど、周りの人間ととりあえず距離を置きたいというスタンスが邪魔をしている。お前はそういう人間だし、その何とかちゃんも、同じこと考えてるのかも」

「君は僕のことをよく分かってるんだね」

まあね、と清水は応じた。

僕にも一人だけ、胸を張って友人だと言える相手がいた。清水尚弘がその彼の名前で、高校では隣のクラスだった。彼は僕なんかとは比べものにならないほど交友関係が広く、僕にとっての顔見知りは大半が彼にとっての友達だった。そんな彼がどうして僕なんかと親密に接しているのかは、分からない。中学からのつき合いだが、別段の理由もなく生まれて継続している友達関係なせいで、彼のことを深く知る機会には恵まれなかった。

渚にも、そういう友達がいるようだった。隣のクラスの女子生徒で、名前は千川薫子。いかにも古風な日本人らしい名前に似合わず、赤よりの茶色に髪を染めていた。性格も明るく、入学して二週間としないうちに、女子グループのいくつかが彼女を中心として動くようになっていた。

どうしてそんな社交的な女の子が渚なんかと、と頭の隅でいつも思っていた。もっとも、いくら考えても分かるはずがない。僕は、清水の関係がなぜ生まれたのか、他でもない僕自身のことであるにも関わらず、理解できないのだから。自分のことも分からないで、他人のことがどうして慮れるだろう。一番近くにいる他人としての自分は、僕にとっては意味も分からずに使っている公式か、細かい理屈は大学で、とお預けを食らった科学法則に似ていた。僕は理科と数学が得意だった。

僕と渚はそっくりだった。外から、学校での彼女を見る限り、ほとんど同じ境遇で同じように過ごしていた。休み時間や放課後も、どうしてかしばしば顔を合わせた。たとえば学校の図書室で。

高校に入ったばかりの頃の僕は、本ばかり読んでいた。一人ですることと言えば読書くらいしかなく、本を読んでいると、他人を知ったつもりになれるからだ。実際は、渚はおろか、清水のことも何も分からない僕でも、他人の深いところを知ったような気分になれる。読書は楽しかった。それは逃避だよ、と清水は言った。それでも、読書は楽しかった。

理由まで同じなのかはともかくとしても、渚も僕と同じように、読書を趣味としているようだった。彼女が何を読んでいるのか気になったが、盗み見ても判別がつかなかった。いつもテーブル二つ分ほどの距離を開けて座っていたことと、彼女はいつも、読んでいる文庫本にカバーをかけていたからだ。図書室に来てはいたが、彼女がそこから本を借りていくことは稀だった。

こうして僕が彼女を見ているように、彼女も僕を見ているのだろうか。それなら嬉しい。一方通行の興味は空しい。それが嫌だから、僕はずっと、「顔見知り」の人たちとただの顔見知りで居続けたのだから。でも何となく、彼女と話がしたい、もっと近しい関係になりたいとは思っていた。その気持ちが彼女も同じなら嬉しい、という思いだけを抱きながら。

待っているだけではどうにもならないぞ、と清水は言った。僕だ

って同じことを考えていた。どちらも能動的でないのなら、どちらかが動き出さなければならない。見ているだけで思うように転がってくれるほど、世の中は僕に優しくない。それは一五歳の僕にも理解できるたった一つの正しいことだった。

でも、偶然はやってきた。高校一年の、六月のことだった。

その日、僕らは学校の行事で国立能楽堂に足を運んだ。芸術鑑賞教室と銘打たれた行事で、例年、高校一年生はここで能と狂言を観るのだそうだ。狂言はともかく、能の方は退屈の余り眠ってしまう生徒が大半で、何度か一年生を受け持った経験があるらしい担任の先生は、ずっと起きていられたら缶ジュースを奢ってやると冗談を飛ばし、直後に本当ですかと連呼する女子生徒に囲まれていた。その中には、千川薫子の姿もあった。

退屈だとあらかじめ知らされている行事なことも手伝ってか、生徒の中には不平不満を態度で示す者もいた。でも僕は、楽しみだった。

渚と席が隣だったのだ。

ラッキーじゃないか、と清水が茶化した。校外学習のしおりに描かれた座席表を目で追いながら、僕は曖昧に頷いた。本当に隣なのだろうか。僕の見間違いなのではないか。何度も何度も見返した。でも、ランダムなのか何かの法則に従っているのかは定かでないが、僕の名前と彼女の名前は隣同士だった。

でも、仮に隣に座ったとして、何を話せばいいのだろう。間が持つ共通の話題が何かあるだろうか。そもそも僕は会話の引き出しが極端に少ない。相手に合わせることなんてできそうにない。そしてそもそも、話せないならそれでも別に構わない、と僕は思っていた。

ホールへ入り、指定された席へ座った。通路から二番目の席だった。決して観るのにいい席とは言えないが、彼女の隣であることを思えば、それは些細なことだった。正面には木製の舞台があり、微かに森の匂いがした。木の名前は思い出せなかった。舞台の照明は目を痛めそうなほどの強さだったが、会場自体は薄暗く、なるほど

これなら眠ってしまっても仕方ない、と僕は納得して息をついた。
その時、森の匂いが乱れた。隣を見ると、渚がちょうど座るところだった。僕は慌てて舞台の方へ視線を戻した。
自分の一挙手一投足が不自然になっているように思えてならなかった。今までどうやって座っていたのか分からなかった。手を伸ばせば届く、触れられるところに彼女がいる。思い返せば、入学式以来の距離だった。
僕は足元に放り出した鞄から文庫本を取り出した。まだ開演には時間があった。仄かなオレンジ色の間接照明のおかげで、活字が追えないほどの暗さでもなかった。いつも通りのことをしていれば、少しは落ち着けるだろうか、と思ったのだ。
本を開くと、放射状に散った文字の並びが目に入った。
「エディプスの恋人」
僕は本から目線を上げた。幻聴かと思った。でも、僕の左隣の席はまだ空いていて、右隣の渚は、申し訳なさ半分、好奇心半分の瞳で僕と、僕の持った文庫本の上で視線を往復させていた。
「それ、エディプスの恋人だよね」と彼女は繰り返した。「筒井康隆の」
「そうだけど……どうして？」
「そういうページの使い方する作家って筒井康隆くらいじゃない」
呆ける僕を置き去りにして、彼女は場所を弁えた笑い声を上げた。僕が思わずどうして、と口に出してしまったのは、話しかけてきた理由が分からなかったからだ。なぜ一目で僕の読んでいる本のタイトルが分かったのか、ではない。花に止まるかに思えた揚羽蝶が、すんでのところで明後日の方向へ飛んでいってしまったような心地だった。
「そうなんだ。僕は筒井康隆を読むの、このシリーズが初めてだから」
「僕？」と彼女は首を傾げた。「自分のこと、僕って言うんだ」
「変かな」

なるほど「僕」を一人称に使う人は珍しかった。でも、僕にとっては他の何よりも「僕」が丁度いいように思え、それ以外の人称を使うのは、何だか時計の男物と女物を間違えてしまったような違和感があった。僕は、僕でなければならなかった。

「変なんかじゃないよ。全然変なんかじゃない」彼女は顔の前で両手を振った。「その、ごめんなさい。怒った？」

「怒ってなんか」そう見えるとしたら、なるべく内心を見透かされまいと振舞っている結果だ。「むしろ嬉しいくらいだよ。何て言うか、その」

「その？」

「井上さんとは話してみたかったから」

井上渚、が彼女の名前だった。

それから僕らは色々なことを話した。彼女も僕のことには気がついていて、彼女にとっての僕も、何となく話してみたいけれど中々話しかけられない相手だった。僕と同じだった。僕も渚も、最初はどんな言葉を継いでいいのか分からなくて、互いに違う言語を使っているみたいなぎこちないやり取りばかりだった。でもそれも、開演する頃には変わっていた。僕は清水と、彼女は多分、千川薫子と向かい合っている時のように話すことができていた。

舞台が始まると、なるほど能のパートは退屈で、僕から見える範囲で半分以上の生徒がうとうとと眠りに落ちていた。狂言の方は生徒の代表を舞台に上がらせ、ちょっとした狂言講座のようなものを見せてくれたおかげか、場所も遠慮も忘れた笑い声があちらこちらから聞こえた。

自然に話したい。妙なことを口走りたくない。そんなことを意識して誰かと言葉を交わしたのは、初めてだった。嫌われそうな、誰かを刺激するような言動はいつも避けてきた。僕のような立ち位置の生徒は一歩間違えばすぐいじめの対象になってしまうから、目立ちすぎず地味すぎないようにと小学校の時からずっと気をつけてきた。でも、誰か一人のために言葉を必死で選んだことなんて、生ま

れてから一度もなかった。
どうしてなのだろう、と考えた。
退屈な能に、思わずうつらうつらと船を漕いでしまっていた渚の横顔が、ふと目に入った。
僕は、彼女のことを好きになっている自分を見つけた。

それから、僕らが一緒にいる時間は急に長くなった。元々、どちらも交友関係が広くなかったせいもあったのだと思う。たとえば休み時間に少し間が空いたら、どちらからともなく廊下に出て、チャイムが鳴るまでずっと他愛もない話をしていた。放課後も、約束をしたことは一度もなかったが、僕らは毎日のように図書室に通った。これまでも、僕が図書室の戸を開くと、いつもどこかに彼女の姿があった。でも前と今が決定的に違うのは、僕らが同じ一つの四人掛けテーブルに、二人で向き合って座っていることだった。テーブル二つ分の距離は、もうどこかへ消えていた。
千川薫子とも頻繁にではないが、度々言葉を交わすようになった。少なくとも僕は、いつの間にか彼女の数多い友達の一人になっていた。僕は彼女がテニス部の所属であることを知った。三人で下校することもあり、清水には時折文句を言われた。そのうち埋め合わせはするよ、とだけ言っておくことにした。これまでずっと一緒だった相手なだけに、少し疎遠になっただけでも、それが途方もなく大きな変化なように僕には思えた。
七月に入ると、期末試験がもう目の前だった。さすがに僕らも本を閉じ、教科書とノートを広げるようになった。図書室の利用者も、七月に入ったのを境に日に日に増え始め、試験まで残すところ一週間になった頃には、終礼が終わって小走りにならないとテーブル席が埋まってしまうほどの混み具合だった。
高校に入って初めての試験で、僕も渚も不安だった。同じ試験であっても中学までのそれとは違う、と先生は皆口を揃えた。どこまで脅しなのか分からないな、と清水は笑っていた。なるほど半分は

真面目に勉強させるためのただの脅しなのだろうけれど、もう半分は、多分真実でできている。
　そして、試験が始まるまであと四日と迫ったその日、僕は、あの人に再会した。
「よ、井坂」と彼女は、図書室の席でノートに向かっていた僕の肩を叩いた。「久しぶりじゃん。うちの高校に入ったって話だけは聞いてたんだけど」
「るい先輩」と僕は応じた。「お久しぶりです」
　彼女、森野るいは、「るい」という剣道か華道が似合いそうな名でありながらテニス部に所属し、二年生にして学校の代表選手として他校との試合に出場するほどの腕の持ち主で、そして僕と同じ中学の出身だった。男子のような話し方によく現れているが、性格もこざっぱりとしていて明るい。そのせいか、中学の頃は男女を問わずファンが多かった。みんなの憧れだった。
「勉強？　精が出るね」
「先輩だって、期末試験あるんじゃないんですか」
「あたし？　適当にやってなんとかするよ。あんたも、一年もすれば適度な手の抜き方ってのが分かってくるから」そこで彼女は、僕の正面に座る渚の方へ目を向けた。「友達？」
「はい、同じクラスの……」
「井上渚です」と渚は会釈して言った。
「ふうん……」先輩は僕を見て、渚を見て、それからもう一度僕に視線を戻した。
　彼女が何を考えているのか、僕には分かった。渚には分からない。それは多分、僕と先輩の間にしか伝わらない沈黙だった。少なくとも今は。
　僕もまた、先輩に強烈に憧れた者の一人だった。
「君が渚ちゃんかぁ」と先輩は手を打った。「千川から話だけは聞いてる。仲いいんだって？」
　はい、と渚は頷いた。千川薫子もテニス部だったことを、僕は少

し遅れて思い出した。
「じゃ、あたしはもう行くから」と先輩は鞄を担ぎ上げた。「部活がないときくらい、早く帰りたいから。あんたたちも、あんまし根詰めすぎないようにしなよ。高校の試験って言ったって、そんな言うほど大したことないんだからさ。世界史の田村なんて、毎年同じ問題出すくらいだしね。過去問貸してあげよっか？」
「いいんですか？」と渚が応じた。
世界史は、僕も渚も一番頭を悩ませていた科目だった。僕らが授業に慣れていようといなかろうとお構いなしで、序盤から猛スピードで覚えることが噴出したために、どこから手をつけていいのか検討もつかなかったのだ。加えて僕は、元々社会科が苦手で、ただ並んでいるだけの数字を覚えなければならない歴史科目は更に苦手だった。年号を見ると、僕はいつも四則演算で一〇を作っていた。
先輩は僕らのノートを見て、「これあたしも習った」と笑った。
「過去問くらいお安い御用だから遠慮しないで。田村のは過去問なしじゃどうにもならないし、あたしも今三年の先輩たちから貰ったから。明日の放課後、ここに持ってくればいい？」
「お願いします」と僕。「明日もここにいますから」
「了解。じゃ、またね。井坂に渚ちゃん」
悪戯っぽい笑みで片手を挙げると、彼女はあまり場所を考えていない小走りで図書室を後にした。
久しぶりに見た先輩は、僕の記憶の中にいるのと同じか、或いはそれ以上に颯爽としていて、格好よかった。
「綺麗な人だね」と渚が言った。
「うん」と僕は頷いた。「綺麗だよ、あの人は」
それから僕らは全校下校時刻まで図書室に居座り、明日も図書室で、と言って別れた。
翌日の放課後も、僕らは図書室で、向かい合わせに座っていた。僕は延々と数学の問題ばかりを解いていた。好きな科目だから勉強時間も伸び、試験の点数もよくなる。清水などは「お前は数学と理

科は勉強しなくても点数とれるだろ」と言っていたが、それはあまり正しくない。好きだから勉強する。その結果、他の科目の点数は下がる。
「古文とか、いいの？」渚が数式で埋まった僕のノートを覗き込んだ。「活用とかややこしいし、時間かけて暗記しないと。世界史は過去問が貰えるけど……」
「大丈夫。それなりに何とかするよ」
「それなりにって。暗記科目は苦手なの？」
「うん。そういうのは苦手。手を動かして数式の展開とか、計算とかやってる方が好き。他のこと全部忘れられるし。目の前に誰かいることも忘れられる」
「何それ」と渚は頬を膨らませた。「私と一緒だと気が散るみたいな言い方されると、傷つくな」
傷つく、という言葉に思わず僕は、ノートに戻しかけていた視線を上げた。彼女の顔は、本気で怒っているわけではなさそうだった。
でも、本気で怒ったのだとしたら、それはある意味、僕にとっては嬉しいことだった。言い換えれば、渚が僕と一緒にいることを望んでいるのだ、とも取れる。ちなみに僕は、本気だった。渚が目の前にいると、どうしても彼女の方に意識を持って行かれてしまう。一〇〇本束で売っているヘアピンで留まった前髪や、眼鏡の奥の澄んだ黒い瞳、制服に包まれた柔らかい曲線を、いつまでも眺めていたくなる。あの校外学習の日、眠る彼女の横顔を目覚めた瞬間から、僕は彼女から目線を逸らすのに必死だった。気がつけば、僕の両目は彼女の姿を追いかけていた。
「ごめん、ごめん。そういうつもりで言ったんじゃ……」
「分かってる」彼女は微笑んだ。「でも、私が見てる限りでは数学と理科の勉強しかしてないよ」
その時、頭上から声が降ってきた。先輩だった。
「ちょっと前までは真逆だったんだよ、この子」
「真逆？」会釈しながら渚は言った。

「そ、真逆。国語とか社会とかがすっげー得意だったの。あたしが教わりたかったくらい」
「先輩は、先輩じゃないですか」と僕。「おかしいですよ、そんなの」
「気にしないの、細かいことは」先輩は僕の頭を紙の束で叩いた。
「はいこれ、田村の過去問」
ありがとうございます、と言って受け取り、僕は早速その過去問を開いた。中には三年分の一年一学期末試験があり、それぞれに名も知らぬ誰かの手による丁寧な解答が添えられていた。問題はほとんど使い回しで、三年分全て暗記する必要はなさそうだった。
「じゃ、せいぜい頑張りなよ、二人とも」
それだけ言うと、先輩はもう用はないとばかりに小走りで図書室を後にした。その背中を睨む司書の先生の形相に、僕らは思わず顔を見合わせて笑いを噛み殺した。まるで般若の面だ、と僕は思った。彼女も同じことを考えているのかは分からない。でも気づけば、同じだったらいいな、と強く願っていた。僕らが初めて、普通の友達同士のように向き合った場所を、思い出させられたからかもしれない。
もう試験まで日もなく、さすがに僕も数学の教科書を閉じて古文や社会科のノートに向かった。僕が覚えられないことを何とはなしに呟くと、彼女はすぐさま語呂合わせや、覚え方のコツを教えてくれた。ただ覚えようとしても駄目、という考え方が彼女は一貫していて、全てを有機的に、横断するものとして捉えていた。助詞の活用などは特にそうだ。ただ覚えるだけでは意味がない。言葉のスタイル、それを話した人の気持ちまで考えて初めて、自然に活用が頭の中に入ってくる。
とはいえ、そこへ至るには時間が足りない。彼女の言うことは理解した上で、僕は大人しく意味不明な文字の羅列を頭に叩き込んだ。好きでなければ分からないこともある。彼女は歴史や古文が好きで、僕は数式が好きだった。

試験前最後の金曜日には、僕は覚えることは大半を暗記し、試験範囲の数式は手癖で解けるほどになっていた。
「井上さんのお陰だよ」と感謝せずにはいられなかった。
実際、もし彼女と一緒にこうして放課後の図書室で向き合っていなかったら、僕は相変わらず理数系科目ばかりに没頭して、他の科目は酷い有様になっていただろう。前日まで手を着けないことだってありえる。中学の時は、それで歴史の点数が学年最下位になったこともある。
僕が彼女に感謝したい気持ちは、社交辞令でも何でもない、本物だった。
「そんなことないよ。だって、その……」と不意に彼女は言い淀んだ。「えーっと……」
「どうしたの？」
「えっと、その、こんなことわざわざ言うのも何か変だと思うんだけど」テーブルの上で十指を絡ませ、俯きながら途切れ途切れに、彼女は言った。「私、あなたのこと、何て呼んだらいい？」
昔の天皇の名前を書き写していたシャープペンシルの芯が折れた。晴天の霹靂だった。なるほど僕は、彼女のことをずっと「井上さん」と呼んでいた。でも、彼女は僕のことを呼ばない。一度たりとも呼んでいない。ずっと、人称が必要になりそうな会話を避けていたのだ、彼女は。
「そうだなぁ……」僕は思わず腕を組んだ。「改めてそう言われると、全然思いつかない」
僕にあだ名をつけるような相手はいない。清水だって、僕のことをお前としか呼ばない。そもそも名字以外で他人に呼ばれたことがないのかもしれない。記憶を辿っても、僕をファーストネームで呼んだのは両親だけだった。
「井坂晶……で、合ってるよね？」
おずおずと口を開く彼女に、僕は頷いた。頷いたが、晶、という名前が本当に自分の物なのかもよく分からない。他でもない自分の

名なのに、とても遠いところにあるように思えてならないのだ。まるで嘘でもついているみたいに、胃の辺りが少し痛んだ。
「これがいい、って呼び方は別にないし、これはイヤだってのもないから」僕はペンを指の上で一回転させた。「井上さんが呼びたいように呼んでいいよ」
「それじゃ、晶」
「え？」
「駄目かな」
「駄目じゃないけど……」
むず痒かった。名前の呼び捨てが完全に両親と同じだからかもしれないし、或いは、それを発したのが彼女だからかもしれない。多分後者だ。僕はもう、彼女のことが、好きになってしまっていた。それは逃れようのない鎖のようなもので、彼女の前に立ったときの僕を、一つの姿に縛りつけてしまう。即ち、彼女に好かれたい。嫌われたくない。彼女が好きなものと一緒になりたい。
「私ね、薫子のことも薫子って呼ぶの。分かる？　ちょっと赤っぽい髪がすごい綺麗な子」
「分かるよ」と僕は頷いた。
なぜなら千川薫子は、渚の好きなものだから。
「だから何て言うか……私にとってはすごく普通のことなの。でも、嫌だったら止めるから」
「嫌じゃないよ。全然嫌じゃない。むしろ、嬉しいかもしれない。そうやって下の名前で呼ばれることって、ほとんどなかったから」
「じゃあ、もう一つお願いがあるんだけど」
「何？」
「『井上さん』は嫌だな」
はにかむ彼女に、多分僕の顔は、滑稽に赤くなっていたと思う。ファーストネームで誰かを呼んだことはない。清水のこともただ清水としか呼ばない。僕にとって、誰かを下の名前で呼ぶことは、晶という下の名前で呼ばれるよりも珍しいことだった。

「それじゃあ……渚」
「うん、晶」
「渚」僕は思わず苦笑いした。「何か落ち着かない」
「私も」彼女は微笑んだ。「でも、すぐに慣れるよ」
「そうだね」と僕は頷いた。
結局のところ、人に慣れてしまえない考えなどないのだ。自分のことを「僕」と呼ぶことにだって、僕は慣れている。違和感を受け入れることができている。だからきっと、渚のことを渚と呼ぶことにも、彼女に晶と呼ばれることにも、慣れてしまえるのだろう。それが客観的に見て自然であるか不自然であるかに関わらず。
その後、彼女は思い出したように、努力の話をした。どうすれば暗記できるかを教えたのは自分だが、それを実行したのは僕で、だから誉められるべきは自分ではなく僕なのだ、と彼女は言った。たがが外れたみたいに、彼女は人称を会話に盛り込んだ。晶、晶とその日だけで何回呼ばれたのか、数え切れないくらいだった。一方の僕は、二回だけだった。
帰り道は、清水も一緒だった。渚から、晶と名前で呼ばれる僕を彼はからかった。渚と仲良くなってから、僕と清水の間には、少し距離ができていた。寂しい気持ちはあったが、それならそれで構わない。彼には僕以外にも友達がいる。僕と一緒にいる、深い理由があるわけでもない。
六月の芸術鑑賞の時、渚のことを話題に上げることで、僕に渚と打ち解けるきっかけをくれたのは他でもない、清水だ。それ以外にも、僕は今まで、何でも話せるたった一人の親友ある彼に、幾度となく助けられてきた。これまでの僕は、彼なしにはやっていけなかった。それは間違いない。
でも、もう大丈夫だ。今は渚がいる。仮に清水が僕から離れていっても、僕は一人ではない。
「また来週ね」と彼女は言って、手を振って横断歩道の向こう側へ消えた。

後には僕と清水が残された。夏の日は長く、完全下校時刻を過ぎてもまだ明るかった。長い影が、僕の前に伸びていた。気だるい夏は、まだ始まったばかりだ。

「なあ」と清水が言った。「お前、あの子のこと、好きになったのか」

「あの子って」

「決まってるだろ、井上渚だよ」

「うん」僕は足を止めた。「やっぱりお前は、僕のことを何でも分かっているんだね」

「当たり前だろ。つきあい、長いからな」

僕はそれには応えず、また歩き始めた。

初夏の夕暮れは、時々空が妙な色に染まる。茜色とも紫とも何ともつかぬ、不思議なグラデーションに彩られたそれが、僕はどうも苦手だった。落ち着かなくて、心が騒がしくなる。

「なあ、井坂」と彼は言った。

僕はまた、足を止めた。彼に名前を呼ばれるのは、数年振りだった。

「何？」

「話しておきたいことがあるんだ」

「だから、何？　珍しいね、そんな勿体ぶった……」

「俺もなんだ。俺も、あの子のこと、好きなんだ」

え、と思わず高い声を上げてしまい、通行人に怪訝な視線を向けられる。だが、そんなことは気にもならなかった。

「あの子って、渚のこと言ってるのか」

「ああ。ずっと前からだ。お前があの子を好きになる、ずっと前から。俺がお前を焚きつけたのは、きっかけが欲しかったからだ。お前と井上さんなら気が合うだろうな、っていう確信があった。それで、俺はお前の友達だ。お前と井上さんが仲良くなれば、それ即ち俺との距離も縮まるってことだ。あの子の交友関係は妙に狭いから、俺でもなかなか繋がりを持つことができなかった。でも、今日はこ

うして緒に帰れた。要するにさ、俺はお前をダシに使ったってことだよ、井坂」
「そっか。そうだったんだ。僕が好きになる前からずっと、渚のこと、好きだったんだ」
「そうだよ。だから頼む、井坂。俺のために、引いてくれないか」
彼が僕に何かを頼む。初めてのことだった。清水は交友関係が広い。だから頼れる相手は他に沢山いて、多分、僕は頼られても困ることしかできない人間なのだと、彼は知っている。だから今までは、わざわざ選り好んで僕に何かを頼むことはなかった。
でも、初めて僕に向けられた彼の頼みは、絶対に受け入れられないものだった。
「ふうん」僕は舌打ちした。「話しておきたいことって、それか」
「まあね」
「嫌だよ」と僕は言った。
「お前がそんなにはっきり物を言うなんて、初めてじゃないか」
「そうだよ。僕だって、本気だから」
「俺が言うのもなんだが、引いた方がいいと思うぜ」
「分かってるよ」
渚の気持ちになって、僕と清水とどちらを選ぶのかを考えてみれば、当然のことだった。清水は性格も明るく誰とでもすぐに打ち解ける。同姓はもちろん異性にも人気があるタイプで、彼のような人と友達である自分が、誇らしく思えてしまうような相手だった。対して僕は、異性と交際したこともなければ、もちろん人気があるわけでもない。そもそもいつも一人で、一人でいるのが普通になっているような人間だった。だから、引いた方がいい、と言う彼は正しい。引いた結果、彼女を浚っていくのが他でもない彼だとしても、正しいことだ。
引かなければ、僕は負けることになる。下であることを、思い知らされることになる。他のあらゆることで彼を上回ったとしても、渚を競いあって負けたという一事だけで、僕は彼と対等ではなくな

ってしまう。絶対的に。
　でも、引けばそうはならない。僕は彼と争わなくて済む。彼が渚を得たとしても、僕と彼は、友達のままでいられる。だから、彼は引けと言ったのだ。彼は僕と、このままの友達でいることを望んでいる。
　でも、僕にも引けないことはある。
「もう一度言うけど、嫌だよ」
「そうか。分かった」彼の冷たい意識が僕を刺した。「もう友達じゃいられないかもな、俺ら」

　週明けから試験が始まった。清水に言われたことを、僕は必死で頭の中から追い出した。友達を失うことは怖かった。清水とは、中学以来ずっと一緒の親友で、彼がいない学校生活なんて考えられなかった。僕は自分でそうと分かるほど動揺していた。彼を失うかもしれないこと、そして、渚と一緒にいられなくなるかもしれないこと。
　初めて顔を会わせた時からずっと、彼女は僕と同じだと思っていた。だったら僕が彼女のことを好きなように、彼女も僕のことが好きなのではないか、と思った。でも、僕はそんなに自分に自信が持てるような一五年を送ってはこなかった。清水とは違った。
　僕はかつてないほどに試験に集中できた。問題の向こう側に彼女がいるような気がした。結果が出たら、また君のお陰だよ、と言うことができる。そのたった一言交わす瞬間を想像するだけで、僕のペンは進んだ。学校の試験でこんなに手応えがあったのは初めてだった。全科目が数学であるかのように僕は錯覚した。
　一週間の試験期間はあっと言う間だった。最終日、最後の科目が終わった途端、これで夏休み、とクラス中が浮き足立った。高校受験、慣れない高校生活、そして気づいたときには試験期間。肩の力を抜いてゆっくり休める時期は久しぶりで、皆が浮かれるのも当然だった。それに、高校一年の夏休みは一度しかない。

まだ終業式があるぞ、と担任の先生が窘めた。誰もが生返事だったが、先生もまた、本気で怒った風ではなかった。

解散、と先生が宣言してすぐ、僕は渚の姿を探した。彼女はいつものように一人で、教室を後にするところだった。六月以来、僕らは帰り道もいつも一緒だったが、どちらかから一緒に帰ろうと口に出して言ったわけではない。全部、何となく。暗黙の了解、或いは圧力によって、僕らの関係は成り立っていた。

僕も彼女を追って廊下へ出た。いつもなら、その何となくの了解に従って、彼女は僕が来るのを待っていた。それで二人で下校の路につく。時々清水が加わる。いつの間にか、それが僕らにとって、少なくとも僕にとっての普通になっていた。

でもその日に限っては、僕が廊下に出て辺りを見回しても、彼女の姿はなかった。もしや清水と、と浮かんだ考えを僕は無理矢理押しつける。そんなはずはない。そんなはずはないのだ。絶対に。何か用事があったのだろう、と僕は納得することにした。

久しぶりに一人になると、何だか落ち着かなかった。周りの生徒たちは、皆二、三人ずつ束になって廊下を駆け抜けていく。誰も見ていないのに間が持たないような気分に陥り、僕は鞄の中を漁っている振りをした。

るい先輩に借りた過去問が指先に当たった。

思えば、二年の先輩たちも今日で試験期間終了なはずだ。返しに行っても邪魔にはならないだろう。借りたまま放っておくわけにもいかない。

僕は二年生の教室へ足を向けた。一年の教室からは丁度一階上に位置していて階段を上がるだけなのだが、入学以来、一度も足を踏み入れたことがなかった。二年の区画は二年の、三年の区画は三年のもの、という目に見えない縄張り意識のようなものがあって、入りづらいのだ。

そして、足を踏み入れた途端、僕は意外なものを目にしてしまった。

渚がいた。るい先輩と二人だった。僕の方には気づいていないようで、だが、こちらからは表情が読みとれる程度の距離だった。
二人とも、いつになく真剣な表情だった。何を話しているのかは分からなかった。そしてどうしてか、僕は、二人のいる方へ歩み寄っていくことができなかった。立ち入ってはいけないという暗示めいた何かが、僕の足をその場に縛りつけていた。
何もおかしいことはない、と僕は自分に言い聞かせた。るい先輩は僕の中学時代からの先輩で、渚は僕の友達。二人は図書室で顔も会わせている。二人だけで話していても、何も不自然なことはない。
その時、誰かが僕の肩を叩いた。
「千川さん……？」
「や。井坂晶……で、合ってるよね」
僕は頷いた。
そこにいたのは紛れもなく、千川薫子だった。赤よりのブラウンに染めた髪が、今日も変わらずに綺麗だった。どこか悪戯げに微笑む彼女に、僕は思わず身構える。明るくて、可愛くて、顔も広くて時に妬まれさえする彼女のような人が、どうして僕なんかに話しかけるのか、分からなかった。渚を通じて顔と名前、人となりは知っていたけれど、直接紹介されたわけではない。言葉を交わすのは初めてだった。
「一緒に帰ろ。部活とか、ないっしょ？」
僕はまた、木偶人形のように頷いた。頭の中は、疑問符で一杯だった。一人で来て、と渚は先輩に呼び出されたのだろうか。それとも渚は、一人で先輩に相談したいことが何かあったのだろうか。答えは分からなかったが、考えないことにした。先輩と渚のことは、見なかったことにしよう、と決めた。多分二人も、僕に見られることを望まないだろう。
とにかく僕は、ここから立ち去る理由ができたことが、単純に嬉しかった。
千川薫子は、最初に僕を晶と呼んでいいかだけ確認すると、僕が

何か言うまでもなくずっと話し続けていた。僕と渚に関わりのある二割を聞き、適当に相槌を打ちながら残りの八割を聞き流しながら、僕は内心、彼女に感服していた。話題の引き出しが、僕などには想像もつかないほどに多いのだ。これだけ多くのことを知っていれば、誰とでもすぐに仲よくなれるのも道理だった。

だからこそ、不思議でならないのだ。なぜ、友人に事欠かないはずの彼女が渚や、そして僕なんかを気にかけるのか。何せ今日、たった今、試験が終わったばかりなのだ。普通の女子のように、彼女には一緒に買い物に行き、カラオケで騒ぎ、ファストフード店の席を何時間も占領して喋る友達がいるのだ。そうするのが普通であって、僕のような相手を気にかけるなんて、彼女の学校での立ち位置や性格を考えれば、奇妙なことだった。

すると彼女は、そういう僕の考えを全部見透かしたみたいに、僕の目を覗き込んで言った。

「どうしてだと思う？」

「何が」

「あたしが、どうして渚と仲良くなったのか」彼女は天を仰いで、それからアスファルトの路面に目を落とした。「不思議でしょ。あたしと渚って全然タイプ違うし、ぶっちゃけ正反対だし。実はどんな友達よりもあたしが話を合わせ辛いのって、渚なんだよね」

「千川さんが？」

「薫子」

「ごめん、その、薫子……にも、話が合わせ辛いなんて思うこと、あるんだ」

「あたしも本を読まないわけじゃないけど、あの子が読むみたいなジャンルは全然知らないし」

常にカバーのかかっている文庫本を、僕は思い出した。

そして同時に、どうして、という疑問が強くなった。話を合わせ辛いのなら、ますますなぜ彼女と渚が仲良くなったのかが分からない。

「何て言うのかな」彼女は長い髪の毛先を、爪の短い指で探っていた。「晶なら分かってくれると思うんだ。すごく言い辛いことだし、でも、晶ならさ。今じゃなくてもいいんだけど、いつかは」
「どういうこと？」
「あの子、放っておけないんだよね。ああ見えて不安定だから。あたしが見てないといけないんじゃないか、って思うんだ。でも、あんたたち見てると……その役割はあたしじゃなくて、あんたのものなような気がしてくる」
僕は言葉に詰まった。彼女は一体、僕に何を伝えたいのか。
僕が黙っていると、彼女はまた口を開いた。
「ボーイズラブってどういうものか、分かる？」
「何となく。手に取ったことはないけど」
「あたしも似たようなもん」彼女はとりあえずの笑いを浮かべた。
「あの子はね……いや、これをあたしが教えちゃ、ずるいかな」
「渚、そういうの、好きなんだ」
男が男を好きになる小説や漫画で、多くは性的な関係を含むものだ、くらいのことなら僕も知っていた。そして多くの若い愛好者は、それを自分が愛好していることを隠したがる。アブノーマルである自覚、普通の感覚であればそれが異常で、軽蔑されても仕方ないのだと理解しているから。
でも、それで人間を否定するつもりは毛頭ない。意外とは思えども、落胆はしなかった。多分、何となく予想はついていたからだ。読書が好きな人同士が集まれば、必ず自分の好きな本や作家を相手に勧めようとする。渚はそうしなかった。
僕が失望することを、きっと千川薫子は心配しているのだ、と僕は思った。
でも、彼女は立ち止まり、僕の方を向き直ってこう言った。
「好きなだけなら全然いいんだけど」
「……どういうこと？」
「お願い。あの子のこと、分かってあげて。受け入れてあげて。そ

れができるのは、あんたしかいないと思うから」
千川薫子はそう言って、夕闇色の笑顔を僕に向けた。
その日は、連絡先の交換だけして僕らは別れた。
千川薫子のような女の子が、正直に言うと、僕は苦手だった。向こうにその気はなくとも見下されているか、それとも笑われているかのように思えてしまうからだ。偏にそれが、僕の劣等感から生じるものだとは理解している。でも、そういう気持ちが生まれてしまうのは確かで、だからこそ、僕の劣等感は加速されていく。人間としての絶対的な価値の違いが、否応なしに認識されてしまう。
僕は劣っているのだ。千川薫子よりも。清水よりも。
渚と二人でいると安心するのは、そういう劣等感に苛まれずに済むから、なのかもしれない。渚は僕と同じように本を読むのが好きで、あまり社交的ではない女の子だ。だから安心する。彼女より自分が下ではないと思えるから、正直な気持ちのままでいることができる。自分の中に確かに存在している汚さを、忘れさせてくれるような相手は、渚以外にいなかった。僕には渚が必要だった。渚とずっと一緒にいられるのなら、清水との関係が切れてもいい、とさえ思った。少し前までは、清水がいない生活なんて想像もできなかったのに。
そうして海の日が過ぎ、終業式が終わり、夏休みが始まった。
渚と初めて言葉を交わしてから、おおよそ二ヶ月。誰かとこんなに急速に仲良くなったのは初めてだった。僕はどちらかと言えば関係を少しずつ積み重ねていくタイプで、だから親しいと言える相手を見つけるまで、普通の人より長い時間がかかってしまう。ほとんど初対面のような相手をファーストネームで呼ぶことなどできないし、表面的でない、一歩も二歩も踏み込んだ話をそういう相手とすることなどできようはずがない。僕は、千川薫子のように人の中へ踏み込んでいくことができない。そして、自分の中を人に曝け出すこともできない。
社交的とは、薄い会話に充足することとイコールだと、僕は少し

前まで思っていた。でも、そうではない。千川薫子や清水のような人たちを横から見ていると、下らない話題で盛り上がっているだけで、僕とは相容れない、と思ってしまうが、それは正しくない。僕は単にそうやって相手を下に見て、必死に満足して、自分を守ろうとしているだけなのだと、清水の存在が気づかせてくれた。彼らは、僕が思っているより何倍も厚い。千川薫子も、清水も、るい先輩も。

僕は劣っている。だから渚を求める。

七月も終わりに近づいた頃、僕は渚からの電話を受け取った。何か用か、と訊くと、特に用事があるわけではない、と彼女は応えた。でも、何かの目的はあるんだろう、と僕は何となく察した。いわゆる「他愛もない」話が、僕も彼女も苦手だ。二人でいるときも、別段話が弾むことはない。僕らは、千川薫子とその周囲のように、楽しげな声が絶えない関係ではないのだ。それが千川薫子と僕らの間にある、厚みの違いだった。

『宿題、進んでる？』電話口の向こうで彼女は言った。

「まあまあかな。数学は終わったんだけど、それ以外は全然」

時間はまだ午前中で、僕はちょうど、数学の宿題を全て解き終えたところだった。問題集の二章分を予習せよという課題で、B５のノートが丸々一冊埋まった。とは言え、それ以外の宿題には全く手をつけていないので、どうしようかと思案に暮れているところだった。

『休み始まってから、ずーっと数学だけやってたんでしょ』

「うん」

『やっぱり』

「そういう渚はどうなの？」

『私？　私は今、英語だけ終わったところ』

「ずーっと英語だけやってた？」

『うん』

「やっぱり」

英語の課題は、先生が用意した薄いペーパーバックを一冊、全文

をノートに書き写して全訳を添える、というものだった。タイトルは「不思議の国のアリス」。誰もが慣れ親しんだ物語とはいえ、既存の訳文を丸写しにするわけにはいかない。それにただ英文を書き写すだけでも相当な労力を費やす必要があるはずで、まだ七月だというのにそれを終わらせたという渚の集中力には、英語があまり得意ではない僕は尚のこと、感嘆を禁じ得なかった。

もっとも、宿題は数学と英語以外にもある。

「他は手つかず？」

『うん。でも、世界史のレポートとかならすぐ終わりそう』

「まあ、あれは一日あればどうにかなりそうだよね。世界の国々のうち、どれか一カ国を選んで知るところを書け、Ａ４レポート用紙二枚以上……だっけ？」

『そうそう。それに田村先生、宿題を受け取っても読まずにそのまま机の上に置きっぱなしってもっぱらの噂だし』

「それ本当なのかなぁ。僕も話だけは耳にしたけど」

『私は薫子経由で聞いたから、確かだと思う。運動部だとそういう情報も伝わってくるみたい』

「そっか」

『うん』

それきり僕は、何を話していいのか分からず、黙った。人と話していると、こういう時間がしばしばある。ひたすら話し続けて間を持たせることができない。電話が二時間も三時間も続くという話は、僕にとってはフィクションも同じだった。

これが電話でなければ、また本に目を落とせばいいだけだ。僕ら二人が向かい合っているときはいつだってそうしてきたし、向きあう場所は、できるなら私語を慎むべき図書室だった。でも今僕がいるのは冷房を効かせた自分の部屋で、目の前に渚はいなかった。電話口から、彼女の息遣いが聞こえた。一瞬、耳に息を吹きかけられているのかと思い、彼女と電話で話すのは初めてであることにふと思い当たった。連絡先を訊いたのは随分前だったのに。

「あの」僕はやや呼吸を乱して言った。「図書館、行かない？」
彼女と僕の家が比較的近所なことは既に知っていた。どちらも学校へは徒歩、或いはバスで通っていて、家の正確な住所までは知らないまでも、大体の位置は把握していた。中学の学区は違うが、利用する図書館は同じな程度の距離だ。
『今から？』
「いや、今からじゃなくてもいいんだけど……」僕は言葉に詰まった。
多分、僕は、焦っていたのだと思う。夏休みの間中ずっと彼女に会えないことが、耐えられなかった。そして何より、僕が会わない間に、清水が彼女と近づいてしまうことが不安だった。僕の方から彼女に近づいていかないと、清水に持って行かれてしまう。ただでさえ、清水は僕よりも、客観的に見て魅力的な人間なのだ。
今日だって、電話してきたのは彼女の方からだった。最初に話しかけてくれたのも、彼女の方からだった。僕は何もしなかった。でも、それで周囲が都合よく動いてくれると考えることが、そもそも間違いだ。とは言え、それで出てきた言葉が「図書館、行かない？」なのだから、僕はつまらない。
「何か……一人でやっててもいいっていうか、落ち着かないっていうか」
『よかった』電話の向こうで、彼女が言った。
「え？」
『私も同じこと考えてたから』
そうだね、と相槌を打ちながら、僕の鼓動は高まっていた。二人で向かい合っている時間は、僕だけでなく、彼女にとっても自然なものになっていた。それが嬉しくて、僕は笑い出しそうだった。
『世界史の宿題、片付けちゃわない？』
「今から？」
『うん。駄目かな。図書館なら資料もたくさんあるし』
「駄目じゃない。行くよ。三〇分後くらいでいいかな？」

『分かった。その位の時間に行くね』
また後で、と言って僕は電話を切った。資料ならインターネットの方が話が早い、とは言わなかった。課題は会うための口実だ。多分、彼女もそう思っている。
渚に会いたかった。会いたいと思っている自分を、僕は認めずにはいられなかった。図書館に向けて自転車を走らせ、重たい風を全身に浴びながら、僕は叫びだしたくなった。好きだ、渚、と。その気持ちはまるで馬鹿げた青春ドラマのようで、僕は色々な本を読みながら、内心でそういうドラマをどこか軽蔑していて――でも今は、そういうストーリーが馬鹿げているなんて、思わなかった。永遠の断片が、僕の前にぶら下がっていた。

その日以来、僕らは頻繁に図書館で顔を合わせるようになった。時には部活帰りの千川薫子もそこに加わった。写させて、と言う彼女に渚は厳しかった。僕は頬を膨らませる渚をなだめ、この場で書き写していくという条件つきでいくつかノートを貸した。必然的に、部活が休みの日も彼女は図書館に来るようになった。清水はこの場にいなかった。
八月の第一週には、僕らは皆、大半の課題を終えていた。残ったのは一つ。読書感想文だった。
その日も気象庁の発表では猛暑日で、光化学スモッグ注意報が発令されていた。図書館の入口にはそれを知らせる色あせた垂れ幕が気怠げに揺れていて、何だか逆に、注意報が大事ではないかのように思えた。実際、図書館にはいつもと同じように老人や、資格試験の勉強をする人や、或いは受験生の姿があった。二年後には僕らも受験生だと考えても、あまり実感がなかった。将来とは、それこそ夏の陽炎のように不定形で、ふわふわと、どろどろと、うつろい続けるものだった。少なくとも、僕にとっては。
英語の宿題を終えると同時に覚束ない足取りで家路についた千川薫子を見送り、僕と渚はため息を合わせた。

「千川さん、お疲れだったね」
「毎年九月に入ってから始めてたんだよ」
「宿題を？」
「うん。いっつもそうなんだ。早め早めに進めなきゃ駄目だよって、私が何度言っても聞かなかったんだけど、今年は違ったみたい」彼女は僕の方へ一瞬目線を向けた。「晶のおかげかも」
「身近で宿題を計画的に進める人が、今年に限っては渚だけじゃなく、僕もいたから、ってこと？」
「そうそう。薫子はああ見えて影響されやすいから」
そうなんだ、とだけ僕は応じた。それきり僕らは、どちらからともなく黙った。電話の時と同じだった。僕たちは、何気ない会話が苦手だ。
千川薫子がいる時は、会話の歯車は自在に、スムーズに回っていた。僕も渚も、いつもの何倍も話していた。少しうるさくしすぎて、大学生らしき人に睨まれてしまうくらいだった。でも今は二人とも黙っていて、この沈黙は、暑い日のうたた寝のように、心地良いけれど少し苦しい。
すると渚が、意を決したように口を開いた。
「晶」
「何？」
「読書感想文の本、どうするの？」
「ああ、そうだね。何も決めてない」僕は腕を組んだ。「ええと、課題図書は……」
「村上春樹を何か一冊。晶、読んだことある？」
僕は首を横に振った。村上春樹は、生まれてこの方一作も読んだことがなかった。著名な作家で、新作を出せばベストセラーランキングに並ぶことは知っていたが、だからこそ逆に、手を出すことを躊躇っていた。
「渚は読んだことあるの？」
「うん。結構ファンかも。長編は全部読んだ」

「なら丁度いい。オススメ、教えてよ。出来れば感想文が書きやすそうなのがいいな」
「そうだなぁ……」彼女はやや思案して、それから言った。「『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』とか」
名前だけは聞いたことのある小説だった。
「ちょっと探してくるよ。せっかくの図書館だし」僕は席を立った。
図書館にしばしば足を運んではいても、文芸のコーナーを歩くのは久しぶりだった。勉強場所として机を借りていただけで、使った本といえば世界史の課題に必要な資料くらい。僕の場合、読む本は基本的に購入することもあって、出版社別になっていない並びにまず違和感があって、「む」の棚を探すのに存外に手間を取った。
まず文庫を見たが、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』は見当たらなかった。ハードカバーもない。検索機で調べてみると、どちらも貸出中だった。
僕は肩を落として席に戻った。
「どうだった？」と渚。
「貸出中みたい。仕方ないから、買うよ」
「私、持ってるから貸してあげるよ。もう読んじゃったから感想も書けるし、棚に置いておくだけじゃもったいないもん」
「いいの？」
うん、と彼女は頷くと荷物をまとめ始めた。今すぐじゃなくても、と言う間もなかった。
渚の家を訪ねることになるのだろうか。友達の家へ上がるなんて、小学校以来のことだった。ましてや好きになってしまった相手など、慣れないどころか初めての経験で、僕は気が動転していることを悟られないよう必死だった。親しくなった友人を家に上げることは、渚にとっては自然なことなのだろうか。僕にとってはそうではない。清水とだって、一定の距離があった。友達ではあったが校門の外ではろくなつきあいがなかった。僕にとって、友達とはそういうものであり、逆に言えば家に上がらないからといって親しくないという

わけではない。
怖い、と思った。そういう距離になってしまってもいいのだろうか、という疑問が、頭の端に引っかかった。
でも、その時僕が思い出したのは、清水のことだった。彼もまた、渚のことを好きだと言っていた。先を越されたくない、と思った。なら今の状況は、好機だ。清水の預かり知らぬところで、渚との距離を劇的に近づけることができるのだから。
僕も席を立った。家に行く、とはどちらも言い出さなかった。僕らの、いつもの距離感だった。
外へ出ると、八月の重く熱された空気が僕らの頬を打った。僕は自転車で、渚は歩きだった。僕は自転車を押して、彼女の隣を歩いた。蝉の声と、自転車の車輪が回る音がいやにリズミカルで、何だか落ち着きを乱された。
「暑いね」と渚が言った。
黒い髪に隠れて、首筋に汗の玉が流れていた。出会った頃はまだ彼女の髪は短く、項が完全に見えてしまうくらいだったことを、僕は思いだした。
「三六度になるって、今朝の天気予報で言ってた」
「今一番暑い時間だもんね」渚は腕時計に目を遣った。
「今何時？」
「ちょうど午後二時。輻射熱が空気を暖めるまでに時間差があるんだっけ？」
「そうそう。小学校の時に習ったなぁ」
「私、夏休みの自由研究をそれでやったことある。簡易百葉箱作って、時間ごとに気温を記録して、教科書に書いてあることが正しいのか確かめるの」渚は僕のわき腹をつついた。「晶、そういうの好きでしょ」
「まあ、ね」僕は彼女から目を逸らした。
今は好きだ。昔はさして好きではなかった。
それきり僕らは、また黙った。

消えていた蝉の声が蘇った。彼女のサンダルが、アスファルトに当たってからん、からんと音を立てていた。

でも、一番大きく聞こえたのは、自分の心臓の鼓動だった。暑さのせいだ、と思うことにした。彼女が隣にいるからではない。そう思わなければ、この場から走って逃げ出してしまいそうだった。目眩がした。太陽のせいだ、と思うことにした。彼女が隣にいるからではない。そう思わなければ、この沈黙に耐えられなかった。

そうして坂道を上り、幾つかの角を折れ、渚は足を止めた。

どこにでもありがちな、おそらくは建て売りの一軒家だった。二階建てで、外から見る限りでは一階にリビング、それに一台分の駐車場と、よく手入れされた植木が並んだささやかな庭があった。停まっている車は、これもありがちな国産のセダンだった。

表札には井上、とある。車のことからも家族で住んでいることは明らかだが、外出中なのか、人気がなかった。

「晶」彼女は僕の方へ、肩先を掠めるような視線を向けた。「上がってって」

「うん」僕はまた、木偶人形みたいに頷いた。

家の中は、やはり誰もいなかった。僕と渚と、二人だけ。靴を脱ごうとして躊躇い、意を決し、僕は上がり込む。吸い込む空気は、不思議な匂いがした。ありとあらゆる場所から、渚を感じた。目の前にいるはずの彼女が、右からも左からも、後ろからも僕を見ているように思えた。

案内された渚の部屋は、二階だった。六畳ほどの空間に本棚があり、座卓があり、ベッドがあり、勉強机があった。片づけようという努力の跡は見えたが、物の絶対数が多すぎてどうにもならないといった体で、決して汚いわけではないが、綺麗すぎるわけでもない、初めて足を踏み入れた気がしないほど、僕にとっては居心地のいい部屋だった。

「汚くてごめんね。あんまり人が来ることがないから」彼女は建てつけのクローゼットの中からクッションを取り出し、僕の足元に置

いた。「ちょっと待ってて。今、何か冷たいもの持ってくるから」
手伝おうか、と言うと彼女は半ば強引に僕を座らせ、「お客様なんだから、楽にしてて」と言い残して部屋を後にした。すぐにとん、とんと彼女が階段を降りる音が聞こえた。
僕はため息をついた。楽にしてて、と言われたはいいが、緊張しないはずがないのだ。この部屋で毎日寝起きし、本や漫画を読み勉強をしている彼女の姿を僕は想像した。今僕が座っている場所にも、かつて彼女がいたのかもしれない。このクッションは、彼女も使ったことがあるに違いない。いやでも鼓動が高まってしまい、僕は胸に手を当てて深呼吸した。
程なくして、お盆に麦茶のグラスを二つ載せた渚が戻ってきて、僕の隣に腰を下ろした。向かい合わせではなかった。僕らのいつもの距離ではなかった。無理矢理に整えたはずの鼓動がまた乱れ始めた。彼女が机の上に手を伸ばすと、キャミソールから露わになった、汗ばんだ二の腕に触れてしまいそうになり、僕は慌てて身を引いた。
身を引いてどうする、と僕の中で誰かが言った。清水の声だった。僕を笑っていた。
渚は棚の奥から文庫本を二冊取り出すと、僕に手渡した。『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』。ありがとう、と言って僕は本を肩提げの鞄に納めた。
陽の射し込む部屋は、レースのカーテンが引かれていた。やっぱり暑いね、と彼女は言って、冷房の電源を入れた。ややあって、ごおっ、と大袈裟な音を鳴らして冷たい風が吹き出した。部屋の照明は点いていなかったので、カーテンを引いてしまうと薄暗かった。彼女の顔色が、よく見えなかった。麦茶に口をつけたが、味は分からなかった。火照った頬に冷房の風が当たり、頭の奥が痺れた。
「渚」僕は惚けた頭のままだった。「僕、渚にずっと、言いたいと思ってたことがあるんだ」
「何、どうしたの？」
「好きだ、渚。僕は、渚のことが、好きなんだ」

え、と声にならない声を漏らしたきり、彼女の身体は動きを止めた。眼鏡越しの視線は、僕の上で静止していた。
構わずに僕は続ける。
「変なことだし、普通じゃなくて、おかしいってのは分かってる。軽蔑されてもいい。でも……」
「変なんかじゃないよ」と彼女は遮って言った。「普通じゃないかもしれないけれど、おかしくなんかない。軽蔑なんかしない」
「渚……？」
「だって、私もだもん」
隣だった彼女が、いつの間にか正面にいた。そしてまた、隣になった。頬と頬が触れ合っていた。眼鏡のフレームが、僕のこめかみに触れた。抱かれている、とようやく気づいた。
僕は手を伸ばし、彼女の身体を抱いた。何もかもが柔らかだった。力を込めれば込めただけ、掌が彼女の中に埋没していきそうだった。
「ずっと、そうなんじゃないか、って思ってたの」僕の耳元で、渚は囁く。「だって、私とあなたは同じだから」
「僕も思ってた。僕と渚は、同じだって」
「そういうのって、何となく分かっちゃうんだよね。私たちみたいな人たちの間では」
彼女の指が脇腹を這い、僕は思わず身を縮まらせる。
「晶」渚の吐息が、僕の耳を撫でた。「私、晶が欲しい」
「僕は、その、そういう経験がなくて」
「私はあるから大丈夫」
「渚」
「晶」
僕は、彼女の項に浮いた汗を吸った。
渚の指先が、僕のヴァギナを撫でた。
胸が大きくなるにつれて、女である自分が嫌になった、と渚は言った。自分の身体がただの子供でなく、女としての徴候を見せ始め

たときから、周囲の人の目も変わった。女として見るようになった。中学の頃で、男子たちの目が追うものは短いスカートと大きな胸ばかりだった。クラスで一番頭がいいと言われ、委員長とあだ名されている男子と話していて、彼の目線が胸に向いた瞬間、彼女は悟った。女とは、道具でしかないのだ、と。

「あ、私は人間じゃないんだ、って思ったの。男性と女性の間で、対等な恋愛関係なんて、絶対に出来ない。だって、女って、男にとって、快楽のための道具でしょ。どんなに綺麗なこと言ったってダメ。最後の最後では、絶対に男が上で、女が下になっちゃうの。人間性とは繋がりのない身体そのものが、何にも勝る魅力になっちゃうの。私はそういうのが嫌で、どんな恋愛小説を読んでも、こんなの嘘だって思っちゃう。そういうもやもやが嫌で、他でもない自分の性が嫌いで、男の子に生まれたかったって、何度も何度も思った」

男にとっての求められるとは、愛されることと等号で結ばれる。でも女にとってはそうではない。可愛さや、女であることそれ自体が魅力になってしまうから、果たしてそこに愛はあるのかと、疑問に思わずにはいられない。中学生くらいになると、友達の間にはその「女」という存在そのものが武器であることに気づいて、存分に振るい始める子が現れる。彼女のような女の子が羨ましく妬ましく、また同時に気持ち悪いとも思い、そういう矛盾の蓄積が、加速度的に彼女を蝕んでいった。

加えて、女性の恋愛は男性のそれとは根本的に違う。破瓜がある。妊娠がある。結婚がある。子供を授かることのできる、限界がある。単純に愛し愛されるだけで、恋愛することができない。

女の性は、商品にすらなるのだ。

「晶。ボーイズラブって、知ってる？」

「どういうものかだけは」

「私がそういうものにのめりこんだのも、多分そのせいだと思うの。だって、あの世界の恋愛にはそういう余計な物が何もないの。全部が好きだけでできてる。愛しかないの。単純かもしれないけれど、

純粋で綺麗な。ファンタジーだってことは分かってるけど、そういうものが、私にとっては救いになった。本物があるみたいに思えるの。ライバルとか、相棒とか、主従とか、そういう信頼関係から生まれる、男女の性の上下が全く存在しない愛の中に、真実を見ていた。彼らはみんな対等だから。受けと攻めが逆転することだってあるくらいに」

「過去形なんだね、全部」

「今は晶がいるもん」と彼女は笑った。

渚はるい先輩から僕の性的嗜好を知ったのだという。それで僕に近づいた。るい先輩からすれば、ある種の警告のようなものだったのかもしれない。でもそれが、渚にとっては僕の方へもう一歩近づくきっかけとなった。嬉しいことなのか、悲しいことなのか、僕には分からなかった。気持ちが中途半端で、ぼやけていた。七で割られた一六のように。

自分が女であることが嫌だ、という感情は、僕もずっと抱えていた。僕が僕になった理由の一片は、そこにある。

でも、全てではない。

僕らは互いを求め合った。肉体的にと言うよりも、それは、多分に精神的なものだったのだと思う。彼女にとっては僕の存在が支えであり、僕は、彼女と身体を絡めている間中ずっと、清水のことが頭から離れなかった。僕は勝った。清水に。渚は、男であり、より近づくことが自然なはずの清水より、僕を選んだ。その全能感がたまらなかった。僕は清水の知らない渚を知っている。だから清水よりも優れている。僕の劣等感は消えていた。

そして不意に、何もかもが虚しくなった。

その全能感のあまりの下らなさに、気づいてしまったことが一つ。そして何よりも、性行為という一線を越えたときから、僕らは同じではなくなってしまった。互いを求める理由は違っていた。たとえ僕らがどちらも女性で、渚が嫌い、恐れた「道具としての女」からはほど遠い、純粋な愛から生まれた行為だったとしても、近づくほ

どに僕らはすれ違っていた。
八月も下旬にさしかかったある日、僕は渚の部屋で、彼女と向き合い、彼女の眼鏡を外してキスをした。唇と唇が一瞬触れ合うだけの、まるで小学生の遊びのようなキスだった。でも、触れた僅かな粘膜から僕らが融け合い、一つになってしまいそうな深く、暖かい口づけだった。
それから僕は、ごめん、とだけ言った。
その日を最後に、僕は二度と、彼女の肌に触れることはなかった。
太陽のせいだ、と思うことにした。そう思わなければ、僕はこの記憶に、一生縛られ続けてしまう。誰もが通り過ぎる、ちょっとした過ちだったのだ、と思うことにした。そうしなければ、今も残る彼女の香りを、ずっと忘れられないから。
僕らの別れに、「ごめん」以上の言葉はなかった。いつもの距離感だった。

九月に入って学校が始まり、僕は『アフターダーク』を使って書いた読書感想文を提出した。家には、あの日鞄に入れて持ち帰り、借りたまま返す機を逸していた『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』があったが、どうしても、手に取ろうとは思えなかった。僕はそれを、視線の届かない本棚の奥に押し込んだ。
僕と渚の関係の変化に、別段の関心を抱く者はいなかった。元々僕らはクラスの中ではどうでもいい立ち位置の人間で、僕らの人間関係の作り方は、いじめに遭いさえしなければいいという、ひどく消極的なものだった。僕らが互いを渚、晶と下の名前呼び捨てで呼び合うことに奇異の目を向ける者もいるにはいたが、それまでだった。僕から見れば、彼女らは「顔見知り」かもしれない。でも彼女らから見れば、僕はどうでもいい女子の一人だった。むしろ皆僕らを遠巻きにしている風もあり、僕としては居心地がよかった。渚が今、どういう気持ちでいるのかは知らない。僕は学校の図書室へ通うことをやめた。

いや、一人だけ、関心を抱く者がいた。
千川薫子だった。
放課後の、人気のない廊下で、彼女は「晶」と僕の名を呼んだ。
「最近、ってか休み明けから渚と一緒にいるところ見ないけど、何かあったの？」
「何もないよ」と僕は応じた。「多分、最初から何もなかったんだと思う」
僕らの間に言葉はなかった。
「したの？」
何を、とは彼女は言わなかった。でもそれだけで、十分言いたいことは伝わった。僕は頷いた。
そして、それが分かるとは、僕よりも遙かに多く、渚のことを知っている、ということだ。
でも、悔しいという気持ちは、不思議と起こらなかった。渚との関係は、僕の中では完全に終わっていた。
「じゃああんた、今は誰のものでもないんだ」
「僕は初めから誰のものでもないよ」
千川薫子は、表情を変えないまま、ゆっくりと僕の後ろに回り込んだ。窓からは赤い西日が射していた。陽は短くなった。夏の名残を惜しむような、弱々しいヒグラシの声が聞こえる。
「あたし、知ってるんだよ。渚がああなった理由も、あんたが自分のことを『僕』って言う訳も」どうして、と言いかける僕を制して、彼女は続けた。「るい先輩に聞いた。絶対に他人には漏らさないって約束で、教えてくれたの。多分、あたしがあんたや渚と親しいってこと、知ってたからじゃないかな」
彼女は後ろから、僕の身体を抱いた。僕よりかなり身長が高いことに、その時ようやく気づいた。
「ねえ。あたしとつきあってよ。あたしのものになってよ。晶」
僕は頷いた。木偶人形のように。
彼女は僕の手を引いた。廊下を抜け、校舎を渡り、着いたのは軟

式テニス部の部室兼更衣室だった。彼女は僕を先に部屋に入れると、後ろ手に鍵を閉めた。今日は自主練もないの、と言ったその頬は、心なしか上気しているように見えた。それから「大丈夫？」と彼女は訊いた。僕は、何だか今の状況が現実ではないような気がして、多分ひどく虚ろな目で、ぼんやりと宙を見つめていたのだと思う。

「渚はね、中学校の時は彼氏が絶えなかったのよ。今はあんなだけど、昔は髪も長くて、すごく艶々してた。あたしが憧れるくらい。本当に可愛かったの。今の渚も可愛いけど、あの頃にあった華やかさがない。自分で殺してるから。眼鏡だって、中学の頃はコンタクトだったし。でも、あたしに会ってから……っていうか、あたしと一度そういう関係になってから、あの子は変わっちゃったの。今の渚がああなのは、あたしのせいかもしれない。この世に純粋な、好きだけでできてる愛があるだなんて、錯覚させちゃったのは、多分あたしだから」

「それじゃあ、渚と千川さんは、そういう関係だったんだ」

「そ。それでやっぱり違うな、ってどちらともなく関係解消して、渚はＢＬに、あたしはテニスに」彼女は力なく項垂れて言った。「それと、薫子、って言ったでしょ」

「ごめん、その……薫子、さん」

「よろしい」と彼女は笑った。ひび割れた笑顔だった。

僕は中学の頃の渚を想像し、それから、中学の頃の僕自身のことを思い出した。

「僕は……」

話そうと思った。彼女は渚とのことを話してくれた。なら僕も、先輩とのことを話さなければならない。彼女が伝聞でそれを知っているといないとに関わらず。

でも、開きかけた口を、彼女の唇が塞いだ。歯と歯が触れ合った。僕が彼女の唇を丸ごとくわえているみたいな、不格好なキスだった。僕は深呼吸して、一度唇を離した。それから今度はちゃんと、僕らは舌を絡ませ唇を吸った。

それから僕らがどういう行為をしたのかは、あまり覚えていない。でも、千川薫子は渚よりも遙かに行為に長けていて、そして全身が痙攣し、意識が混濁するような快感を、僕は知らなかった。

気づいたときには日はとうに暮れていて、日当たりの悪い位置にある軟式テニス部の部室は、つい先刻まで強い西日が照りつけていたことが信じられないほどに真っ暗だった。その中で、僕らは二人で備えつけのシャワーを浴び、互いの身体に浮いた汗と体液を流した。それから積み上げられていたタオルで身体を拭った。部室にはドライヤーもあった。薫子は、僕の横で長くて赤くて艶のある髪を乾かした。

「中学二年の時、先輩に告白したんだ」部屋の床に脱ぎ散らかした制服を今一度身につけて、僕は言った。「そしたら案の定、断られてさ。当たり前だよね。向こうも女で、僕も女で、告白して、『はい』だなんて言ってくれるわけない。でも、その時の僕は何も考えてなくて……いや、気持ちを伝えることだけしか考えられなくて、告白したんだ。人に憧れたのは初めてだったし、気がつけば四六時中その人のことを考えてるような相手も、やっぱり初めてだったから。それで、断られたけど、先輩は優しかった。本当に優しかった。『あなたみたいに告白してくる人はいっぱいいたけど、あなたは、何だか断っちゃいけない気がするの』って言ってくれた。僕の気持ちだけは伝わったんだ。ただの、先輩を祭り上げて騒いでるだけの女の子じゃなくて、本気なんだって、分かってくれた。最後には、キスまでしてくれた。ちょっと触れるだけで、小学生が遊びでするみたいなキスだったけど、それでもしてくれた。でも僕は、それだけじゃ満足できなくて、それで……」

薫子は、床に崩れる僕を抱き締めた。

「いいよ。知ってるから。あんたは先輩の好みのタイプになろうとした。理科系の大人な男の人が好きだったんだよね、その時の先輩。福山雅治のドラマの影響で。だからあんたはそれ以降、社会科の勉強をほとんどしなくなった。科学。数学。そればっかり。一人称も

僕になった。そうでしょ？」
渚のような、女である自分や周囲への恐怖と嫌悪もあった。でも一番は、先輩だった。先輩の好みは、「僕」を使って話す理科系の博識な男性。だから本を読んだ。科学馬鹿になった。数学の勉強をした。中学二年の、その日を境に。
いつの間にか、僕は薫子の胸に顔を埋めて泣いていた。涙が止まらなかった。何度も何度も、彼女の名を呼んだ。
薫子は、先輩に似ていた。

夏休みの終盤、薫子は図書館で渚に会ったのだという。
「勉強とか、本読んでるとか、そんな風じゃなかったな。本を返しにきただけみたいだった」
「それって、薄緑色のハードカバーと、濃い赤と緑の文庫本二冊？」
薫子は心底意外そうな顔をした。
「え、何で分かるの。超能力？」
「何となく、かな」と僕は誤魔化した。
僕と薫子の関係は、何の問題もなく続いていた。渚とは二人とも疎遠になった。薫子は、一度は男と立て続けにつきあい、そしてボーイズラブに耽溺し、女しか好きになれなくなった渚のことが、身体の関係は終わっても心配で、ずっとつきあいを続けてきたのだ。でもそれは、余計なお世話だった、と彼女は言った。
「渚を守ってたわけじゃない。あたしの方が、渚に依存してたのかもしれない。ペットを飼うみたいな感覚で」
「ペットって」
「それは言葉の綾だけど」彼女は微笑んだ。「でも、あの子、最近彼氏できたみたい。年上の相手らしいけど、今度は多分、本当に好きな相手だと思う。あんたとのことがあって、あの子も、変わったと思うから。気づいてる？　眼鏡、もうしてないよ」
「嘘」
全く気づかなかった。僕の目は、無意識の内に渚を避けていた。

季節はもう秋に近づいていて、来週からは制服も衣替えだった。スカートの素材が変わって、ブレザーを羽織ることになる。時間は終礼、解散の後で、僕と薫子は三々五々帰宅する生徒たちの波を少し外して、人が少なくなってから下校することにしていた。二人でいるところを誰かに見られるのは少し恥ずかしい、という意識もあった。それと薫子は、るい先輩には、今の僕との関係を隠していた。

「あ、ごめん。ケータイ教室に忘れたっぽい」薫子が立ち止まった。

「下駄箱のところで待ってて。ちょっと取ってくるから」

うん、と頷き、走っていく薫子の背中を見送り、僕は昇降口の柱に身を預けてため息をついた。

いつか薫子とも別れる時が来るのだろう。永遠に続くものは、この世のどこにもない。あの夏の日、自転車を走らせているときに捕まえたような気がした断片は、結局僕の手をすり抜け、消えてしまった。その上、女同士である今の関係が、普通の目で見れば不自然であることくらい、僕にだって分かっていた。

ヘテロリシス開裂、という科学用語がある。これは、電子二個を共有する結合が開裂するとき、一方の原子が電子を二つとも持っていってしまう様式のことを指す。一方、その対義であるホモリシス開裂と呼ばれるもののもちろん存在し、これは、それぞれの原子が一つずつ、電子を分けあう開裂を指す。

男と女の別れは、前者に似ている。乱暴で、オール・オア・ナッシングで、均一で本当の意味で対等な関係にはなりえない。でも、ホモリシス開裂で生じる、不対電子を持つラジカルは、非常に不安定で――激しく他者を求める。

陰陽のイオンを生じるヘテロリシスの方が安定で、自然なのだ。

生物は本質的にヘテロセクシュアルだ。自分と違う性を求め、子孫を残そうと欲するのが自然なことで、当然のことだ。だから今の自分と薫子の関係はおかしいのだと、何となく自覚はしていた。でも、女性同士の関係が間違ったことだとは思わない。少なくとも、今の気持ちは本気だから。そして人を愛する自由はあるはずだ。性

別は関係ないはずだ。人は原子とは違う。
不意に、並ぶ下駄箱の向こう側から、声が聞こえた。人気もないから聞いている者もいないと思ったのか、無遠慮に大きい声だった。
「一年の井上渚のこと、聞いた？」
「うんうん。レズの次は援交だってね。すっげー」
「何か頭のネジ飛んでるんじゃないの？　もっと違う高校の方が向いてそう」
「だよねー。ウチ普通の女子校だし」
「えーっと、レズの時の相手の名前、何だっけ」
「井坂晶っしょ。中学の時にるいに告白したって子」
「あー、何か勘違いしちゃったって子か。るいも大変よねー。変なのにばっかまとわりつかれてさ」
「そう？　結構楽しいよ。ああいう子を舞い上がらせるのって」
「うっそー、マジ悪女じゃん」
「ウケる、最高」
笑い声が遠ざかっていく。
「近づいたものはいつか離れる」頭の中で清水が言った。「交差したままではいられない。一つの気持ちを、ずっと持ち続けていることなんてできない」
「そんなもんだよ」と頭の中の友人に、僕は答えた。
少しして、携帯電話を手に駆け寄ってきた薫子は、開口一番僕の顔をのぞき込んで「大丈夫？」と言った。
「何か顔色悪いけど」
僕は深呼吸した。何かが割れる音がした。
「わたしは大丈夫だよ、薫子」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4608n/

Heterolysis

2010年10月8日14時14分発行